

記憶の継承 (2)

——直感・わたし・認識構造——

嶋守 さやか 五郎丸 聖子

The Succeeding of the MEMORY (2)

—The Visualization of Our INSPIRATION in the Study of Tai HIKOSAKA—

Sayaka SHIMAMORI and Kiyoko GOROUMARU

はじめに (五郎丸)

I (嶋守)

II (五郎丸)

おわりに (嶋守)

はじめに

前稿「記憶の継承(1)——『仕方がない』では済まない」という言葉が問いかけること——⁽¹⁾ (以下、前稿) では、記憶を受け継ぐために最も大切なことは「問いへの忍耐」であると述べた。それは、問いへの「答え」には容易に到達できないことを弁え、自身のなかで問いを問いのまま抱え続け、問い続ける姿勢だとも言い換えられる。問いをそのままにするというのはわからないものと対峙することであり、そのしんどさからはできうる限り逃れたいと思うものだ。そして、「わかりやすい」物語や合理的に見える説明を問いへの「答え」としてしまいやすい。だがそれでは、過去の、誰かの記憶と、それを受け継ぐわたしのいずれもが尊重されないことになりはしまいか。その気づきを「問いへの忍耐」という言葉に私たちは込めた。

前稿を書き終えた2018年の冬、私たち (この論文の共著者である嶋守と五郎丸) は彦坂諦⁽²⁾さんと偶然に出会った。彦坂さんの発する言葉を聞いた私たちは、もっとお話を聞きたいと感じインタビューを申し込んだ。そのときの私たちが突き動かしたのは「直感」であったが、のちの私たちは、彦坂さんが「問いへの忍耐」を長く実践されていることを知った。

彦坂さんの問いは、(ご自身が)「どうして大日本帝國が喜ぶような純粹培養された愛国少年、軍国少年になっていたか」というものだった。彦坂さんはこの理由を知ろうとしてきたことが「私の生涯を決定した」とも語っている⁽³⁾。また彦坂さんは、その問いを自身の内で問い続けただけでなく、他者へも問い続けてきた。

本稿では、彦坂諦さんからの聞き取り——「聞き取り」により得た内容 (話された内容) とともに、行為としての「聞き取り」あるいは「対話」——を通じて「わたしが記憶を受け継ぐ」

とはどういうことかについて考察する。彦坂さんへと問う私たち（嶋守と五郎丸）それぞれが、問い続ける彦坂さんとのやりとりによって、いかに揺さぶられ、問い続けることになったのか。以下では、私たちの「記憶を受け継ぐ」プロセスを示していきたい。

I 「記憶の継承」のプロセス化・嶋守

1 戦争を知らないわたしたち

この論文を共著にすると決めると、この論文の共著者である五郎丸（以下、五郎丸とする）は私に國分功一郎の対談記事を送ってきた。「直感」についてである。そこには、こう示されていた。

「直感」という言葉にはちょっとしたこだわりが込めてあって、まず、「直感」と「直観」という同じ読みの方の2つの言葉がありますよね。哲学では「直観」のほうを使うことが多いけれど、こちらは非常に理知的なイメージの単語ですね。それに対し「直感」は感覚的です⁽⁴⁾。

「感覚的」ということについて、國分は「現場を通じて具体的に『直感』する」ことが大切だという。「この言葉」には「特殊な身体性が織り込まれているというか、『具体的に体で感じ取る』というイメージ」があるのだと。

「記憶の継承」と称したこの論文で継承しようとしている記憶も、具体的に体で感じ取り、直感したいと望んでいるのも、つまりは戦争についてである。そのきっかけが、彦坂さんととの対話だった。動画配信のために彦坂さんに私たちでインタビューをしたのは、2019年4月28日。そして、この論文を書いている2020年10月20日現在、その思いはさらに強さを増した。年月日を逐一書くのは、今が今、コロナがまったく終息しないためである。

わたしたちは、戦争を知らない大人になった。そしてそのわたしたちが現在、新しい生活様式に則ることを社会的に強制されるような生き方をしている。そうなるとは、露ほども想定していなかった。「分かった」のだと実感できないままに、ただ時間だけは過ぎていく。まったく知らないうちに、時代と呼ばれるものが変わっていく。これが、歴史なのか。それも分からないまま、何かが移ろっていく。

だからこそ、「記憶の継承」と銘打って書き付けておかななくてはならない。この論文を書いている私たちに共通する意識は、「残しておかななくてはならない」という切迫感だ。私はそれを、「記録することへの責任感」だと断言する。今生きているはずの現在が何であるのかを「書く」。いつかは過去となる現在で体感できていることを、せめて後に類推できるようにしておきたい。それも、きっと直感だろう。今、ここに示しておかなければならないという焦燥感がきつと呼び込んだ大澤真幸の言葉に、私ははっとさせられた。それは少し長い、ここに引用したい。

こういうとき、私たちはいかに困難でも、まさに感じ、経験していることを言葉にしようとする努力しなければならない。仮に完全には成功しなくても、できる限りの力を使って、言葉にするべきだ。なぜなら、言葉にしたことだけが——いや正確には言葉にしようとしたことだけが——、私たちが今経験していることから得つつあることを、有意味な変化として私たちの態度のうちに定着させるからだ。少なくとも、何とか言葉として捉えようと努めたことは、「うまくは語れなかった」という不充足感とともに残り、後に概念によって救いとることができる。逆に、渦中や直後に言葉にしようとする努力がなかったときには、それはすっかり忘れられ、結局、私たちのうちにいかなる有意味な変化をも惹き起こさない。だから、私たちは、今のうちに——いろいろと語り書いたときに「ほんとうに思ったこととそれとはまだ違うな」という感触を生々しくもてる間に——、言葉にすべく努める必要がある⁽⁵⁾。

彦坂さんと対話したこともまた、私の記憶になってしまった。記憶は嘘をつく。誰に？ 記憶した本人である私に。しかし、まだそれを忘れきっていない今ならばまだ、記憶したことを「言葉にすべく努める」ことはできる。彦坂さんの話を聞いた私のなかに、生々しく残っている感覚があるからだ。それを言葉にするならば、——彦坂さんの話を聴いたとき、私はとてもぞわっ、とした。それはまるで体内から毛羽立つような、体感だった。

2 彦坂諦さんのお話——戦争とジェンダー

2020年度における「現代社会と女性」の第9回目の講義のテーマを、私は「戦争とジェンダー」とした。2020年7月30日、その頃はすでにコロナ禍のためにオンラインでの開講だった。私は教材として、五郎丸とともに彦坂諦さんにインタビューをした「第3回フェミニズム・リサーチ・ライブラリ」の動画を学生たちに示した。その動画を視聴するための参考文献として、彦坂諦(2009)「日本兵と男性性⁽⁶⁾」を提示した。授業課題として動画を視聴し、参考文献を読んで、それらの内容をまとめるように私は学生たちに指示した。

校内のオンラインシステムを通じて、彦坂さんへのインタビュー動画のURLを学生たちに示したとき、私は酷く安堵した。それは先述した、今、私が生きているはずの現在を「残しておかなくてはならない」という「切迫感」、いつかは過去となる現在で体感できていることを、後に類推できるようにはしておきたいという「焦燥感」をもたらしたきっかけが、過去の私にあったからだ。その、とある出来事で受けた言いようのない絶望感や衝撃に私は長く囚われていた。インタビューで得られた彦坂さんのお話に対する私の理解は、その衝撃を受けた私だからこそ導けた一つの解であった。その内容に私はとても納得したからこそ、それが私の腑に落ちていた。自分の理解を自分の言葉として伝達する。その解をようやく示せたことで、「記録することへの責任感」を少しは果たせたように感じられたのだった。

戦争をジェンダーでみる。それが、彦坂さんの語りだった。

学生たちの前で「ジェンダー」を説明するとき、私は非常に難儀する。「いわく『女』は『女

子がひざまず跪いて坐する形』であり、『男』は『田』と『力』の組み合わせで、力は『朶すきの象形』だと説明されている⁽⁷⁾。字の源として、男・女がこのような説明されることは習ったことだから知っている。しかし、ただの音、字義としてではなく、ジェンダーということばで私は何を伝えたいのだろう。彦坂さんの語りを体得した今なら、それは上野千鶴子が「にくんだもの」として示す「同化を強要するファシズム⁽⁸⁾」だと私は言語化する。

「ことばのたたかいは、観点——ものの見方のたたかいだ」とする田中克彦は、「一つ一つの単語の意味をきめるのは、文脈つまり、前に何が来て、後に何が続くかだ」とする。「文脈とは使用 (Usus) であるから、もとをただせば人間 (話し手、使用者) が作ったものである」のだと。それゆえに単語の意味、そして文脈は、「言語外の社会的圧力によって作られたもの⁽⁹⁾」であるのだと。

男・女であるということの「言語外の社会的圧力」の根元に戦争があった。「同化を強要するファシズム」について私は、上野が著した「第2次世界大戦中にイギリス軍の捕虜となった数千人に及ぶドイツ軍兵士の盗聴記録をもとに、歴史学者と社会心理学者とが兵士の心理と行動を分析した」というゼンケ・ナイツェル、ハラルトヴェルツァー著、小野寺拓也訳『兵士というもの』(みすず書房、2018年)の書評に学んだ。

上野が示した「一定の条件下におけば、人種・国籍・理念・イデオロギーを問わず、平時には『ふつうの男』たちが、かんたんに『殺人機械』に変身するという事実⁽¹⁰⁾」は、彦坂さんが「兵」を語る文脈にとっても似ている。そう感じたのは、2018年12月23日に行われた上野千鶴子が主催する認定特定非営利活動法人ウィメンズ アクション ネットワーク (以下、WAN) の書評セッションで彦坂さんがパネリストとして招聘されていたことと、その資料として先述した上野の書評記事が配付されていたからだ。

この書評セッションに私は、五郎丸の誘いで参加した。その開催についての話を聞いたとき、彦坂さんとともに出演していたもう一人のパネリストのお話が聞けるという物見遊山に、私は「面白そうだ」と単純に思っていた。しかし、ただ偶然に耳にしたはずの彦坂さんのお話が、とても面白く興味深かった。

戦争で兵となった男は「物」になり、女は「もの」にされる。よく聞きはするが、「物」、「もの」って何だ？彦坂さんから戦争とジェンダー、「物」と「もの」のお話を聴いたら面白いに違いないと直感した途端、反射的にわたしの体が動いていた。「彦坂さんのインタビュー動画をつくりたいです」とわたしは彦坂さんに話しかけ、amor で始まる彦坂さんのメールアドレスを持っていた紙に書いてもらっていた。

3 無声のリフレイン

それがいつ、どこで遭遇したことなのかを書くことができないこともある。個人や団体が特定できないように配慮すべきとされているからだ。しかし、前項で示した「その、とある出来事」が過去の私にあったことは事実で、それのおかげで私は「言いようのない絶望感や衝撃」に長く囚われることになった。

2020年10月に上梓した拙著『寿ぐひと 原発、市民運動、死の語り』に取りかかる前のことだった。当時は本務校以外の場で語る機会が多くあった。拙著のための取材で私は既に、「原発、市民運動」に出会してはいた。けれども、拙著のなかで私が語るべき言葉、探るべき主題が見つけれられずに私は迷走し、完全な思考停止に陥っていた。

ある時、「原発」をテーマに、20歳前の若者が私に言った。「日本は戦争ができない国ではなく、しない国になるべきです。」私は若者にたずねた。「その意見を発するための、あなたの情報源は何?」「ネットです。」「そう。今言ったことがあなた自身の意見でもあるの?」若者は肯定した。その素直さに呆気にとられ、私は返す言葉に詰まった。大勢の人の前でその若者が、「わたし」の意見を発言できた勇気を、まずは称えよう。私は若者に言った。「良くできました。」

しかし、そう言ってすぐに私は後悔した。「良くできました」? 何が? 今、私は何を褒めたんだろう? ふわっとしてんな。そのせいかな? その後、その意見から何の議論にも発展せず(発展させられず)、その時限は何事もなく終了した。しかし、なのか、だから、なのか。私が発したゆるふわな「良くできました」の言葉はその後、まるでブーメランのように幾度も思い返され、何度も私の脳天をいたく直撃した。ブーメランの衝撃はその後、無声のリフレンになった。

ああ。「良くできました」なんて、言わなきゃよかった。むしろ、他に言わなきゃならない何かがあったらうよ。それは何だった?……情報源が、「ネット」って何なの。たぶん、これだ。

幾多の「イイネ」の数で推されていても、それが事実とは限らないよ。それをどこの誰が示したのかも確認しないまま、『リツイート』や『シェア』といった『他者の言葉に対する何の留保もない相乗りと反復』⁽¹¹⁾にそのまま乗じるの? 「日本は戦争ができない国ではなく、しない国になるべきです。」というネットの情報を鵜呑みにし、自らの意見にすることに疑問を抱かないの? 「しない国」になれたとしても、どうなるかはわからないということは怖くない? 少なくともこう、その若者に私は言えたら良かった。何度も何度も考えて、私は悲嘆にすら暮れた。

私はそれができなかった。ここに書いた返答で良いのかも、わからない。わからない自分を侮り、私は己の無知を相当恨んだ。そして気づいた。そうか。言い返せる知恵が私にないのだ。私が欲しいのは、知識だけではないはずだ。意見を疑問へと繋ぐための想像力。その想像力を、直感する「わたし」と若者に惹起させ続けられる知的体力。私が欲しいのはきつと、それだ。

「知的体力」は鷲田清一から借用した言葉であり、この出来事が起きてから随分あと——『寿ぐひと』を書き終わる頃、になって見つけたものだった。「知的体力」への鷲田の説明はこうだ。

必要なのは、わたしたち一人ひとりが、できるだけ長く、答えが出ない、出せない状態のなかにいつづけられる肺活量をもつこと、いってみれば、問えば問うほど問題が増えてくるかに見えるなかで、その複雑性の増大に耐えうる知的体力をもつこと。いま一つは、迷ってもそこに根を下ろしなおすすめのできる確かな言葉、そこから別のさまざまな言葉を紡

いでゆけるあきらかな言葉と出会うこと⁽¹²⁾。

「問えば問うほど問題が増えてくるかに見えるなかで、その複雑性の増大に耐えうる知的体力」が必要なのは、「わからない」と感じられた各々の文脈において「問題解決のコンテクストをみずから紡ぎ、編んでいく⁽¹³⁾」ためだ。それは、「わからない」から「知りたい」と望む知的好奇心を刺激することだと私は考えている。「わからない」と降参するのにも、「わからない」からこそ「知りたい」と反射的に体が動くのにも、直情的な素直さが必要だ。後付けできる理由や理屈を抜きにした単純さ、無垢な純真さ——そしてそれが、「直感」なんだろう、恐らく。

それらしく見えるネットの情報よりも、「直情的な素直さ」、「後付けできる理由や理屈を抜きにした単純さ、無垢な純真さ」、直感を揺さぶることで伝えられる私の言葉と知的体力を備えたい。こうした思いが、彦坂さんの語りを聴きたいという私自身の「わたし」を駆り立てた。ここで言う「わたし」とは、私の核をなす「直情的な素直さ」、「後付けできる理由や理屈を抜きにした単純さ、無垢」で無防備、純真なわたしである。そしてまたそれが、現在の私が言語化できる「わたしの直感構造」だった。

さて、彦坂さんへのインタビューのために彦坂さんに会いに行く段になって、私は驚愕した。彦坂さんの書評セッションのときに配布された資料はあるものの、何のメモも私がしていなかったことに気づいたからだ。私は彦坂さんが書評セッションで配布した「記憶の風化と記憶への冒瀆⁽¹⁴⁾」と『男性神話⁽¹⁵⁾』、「日本兵と男性性⁽¹⁶⁾」、他にもいくつかの著書を読んだ。

「記憶の風化と記憶への冒瀆」から、私は彦坂さんが少年時代に「同年輩の中国人や朝鮮人の少年たち」から受けた「いわれなき迫害」について知った。『男性神話』を選んだのは、千田有紀が「戦争における暴力と男性性について考えられた本」と紹介していたからだ。「女性を『モノ』扱いしたときに、男性の身体はどのように位置づけられるのでしょうか。男性による暴力の考察がなされることが必要だと思わされます⁽¹⁷⁾」と千田は記述していた。

「女をものにするにかける男たちの情熱⁽¹⁸⁾」、「ほんとうに女が自分のものになったことを実感したければ、殺すほかはあるまい⁽¹⁹⁾」という「戦時強姦」の記述は、確かに『男性神話』にあった。そして、男がそれをしたのは「同調への圧力」ゆえのことだと。

男が、「内地」にあつては、処罰されるおそれがあるから——みんながやるわけではないのだから——あるいは社会的地位や名誉を失うのが怖いばかりに、自制していたそのおなじことを、「戦地」では、みんながやるから——したがって、処罰される危険も社会的地位や名誉を失う危険もすくないから——安んじてやっていただけのことだ⁽²⁰⁾。

同調への圧力、インタビューにおける彦坂さんの語りの詳細は、五郎丸に譲ろう。「わたし」の直感から「私」の疑問という「問題解決のコンテクストをみずから紡ぎ、編んでいく」知的体力に恵まれたひとが彦坂諦さんだった。

II 「記憶の継承」のプロセス化・五郎丸

1 彦坂さんとの出会い

ここではまず、彦坂諦さんとの出会いの場面を思い起こしてみたい。それは2018年の12月のことであった。嶋守と私は、戦争トラウマの研究をされている中村江里さんの著書『戦争とトラウマ——不可視化された日本兵の戦争神経症』（吉川弘文館、2017年）の書評セッションに参加した。コメンテーターの一人として参加されていた彦坂さんが「兵士とは何か」を語る言葉を聞いて、私たちはそれぞれに揺さぶりを受けることになった。

「兵士」が「兵士」としてつくりあげられていく初年兵教育には私的制裁という限りなく理不尽なものに伴い、その背景には強烈な同調圧力がある。それを「みんないっしょ」ならと受け止めて適応できるかできないかが分かれ目のだと彦坂さんは語った。私は、彦坂さんが語ることで「兵士」が何たるものなのかをようやく実感として受け止められたような気がした。

これまでも戦争体験に関しては触れる機会も多い方だったかもしれない。だが、それへの理解というのは表層的なものだったし、少なくとも「ああ、そういうことなのか」と言った感覚はなかった。だが、彦坂さんの語る「兵士」は、自分が最も恐ろしく感じる状況でつくられることを知ったことから自分に引きつけ、自ずとそれは「実感」したように捉えられたのであった。「みんないっしょ」の振る舞いあるいは考え方にならねばならないことへの恐怖にも似た感情が幼少の頃より私にはあった。そのような考え癖のある私にとって彦坂さんの語る「兵士になること」の語りには恐怖と嫌悪感を伴ったために「実感」したように感じられたのである。

ところで、上記で私が用いた「兵士」という言葉については記しておくべきことがある。実はこのとき彦坂さんは「兵士」ではなく「兵」あるいは「兵隊」と言った可能性が高い。なぜなら、彦坂さんは「兵士」という言葉は使わないことを公言しているからだ⁽²¹⁾。だが、私のメモには「兵士」と書かれていた。彦坂さんの言葉へのこだわりを知る前であったために、私は普段使用している言葉へと置き換えた可能性が高い。

2018年12月に話を戻そう。嶋守も彦坂さんの語りに揺さぶりを受けていたようで、書評セッションが終了する前から、確か彼女は「彦坂さんにもっと話を聞きたい」と書いたメモを私に見せてきた。共感しつつも返答までに時間がかかる私をよそに、すぐさま嶋守は彦坂さんの元へと走り寄って話しかけ、コンタクトを取っていた。

嶋守と私は、実は高校の同級生なのだが、彼女は当時から思いを行動に移すのが早い。私は正反対に思いを——それはモヤモヤとした感情と言い換えられる——言語化し、それがどのような思いなのかを自覚しないと態度や行動に移せない。彦坂さんへのコンタクトを取る際も、私たちの性質がはっきり現れていた。だが、思いから行動へのプロセスが異なるだけで、その思いは一緒であることは少したつてからはっきりすることになった。だからこそ、彦坂さんへのインタビューが実現し、こうしてそこからの思考を書き付けているのである。

なぜ、このようなことまでツラツラと書くのかといえば、まさに、上記で述べた「モヤモヤとした感情」、すなわち「直感」こそが、本稿での問い「わたしが記憶を受け継ぐ」とはどう

ということかを考える上で重要な鍵となったからである。

2 「記憶の継承」への違和感

前稿の結論では、「記憶の受け手であるわたしたちにできるのは（その記憶を：引用者）〈わたし〉に引きつけ、思考し続ける真摯さ、誠実さを持つことだった」と述べたが、これに対して社会学研究者の友人から次の指摘を受けた。上記のようなスタンスで記憶を受け止めようとすると、「『他者』なかでも最も重要な『当事者』のいない記憶になってしまうのか」というものだ。それは、受け手の意識が前面化することへの危惧であり、すなわち「当事者」の記憶を受け手の都合の良いように変容させてしまうことへの危機感ということだろう。

だが、私たちの危惧したのも実は同じであった。だからこそ、受け手は、その記憶を「〈わたし〉に引きつけ、思考し続ける真摯さ、誠実さを持つこと」すなわち問いへの忍耐を受け止めるべきだと、前稿で結論していたのである。それは、記憶の受け手が「記憶の継承」をその記憶から課題を見出すことと捉えがちであることへの私自身の体験からの気づきがもとにあった。それゆえにそのあいだにあるはずの自問自答、すなわち問いへの忍耐というプロセスが受け手の中で抜け落ちてしまうことへの戒めでもあったのである。

だが前稿を書いた後も「記憶の継承」への違和感は私の中でくすぶっていたし、友人の指摘についても逡巡は続いた。そのようなときに彦坂さんと出会った。

2019年10月、彦坂さんへのインタビュー動画を web 上で公開するための編集作業を嶋守さんで行った。その際に、改めて彦坂さんと私たちのやり取りに向き合った。その作業過程で、彦坂さんとのやり取りとそれをふまえた私たちの思考のプロセスを記録として残しておきたいという思いが私の中に生じた。

インタビューで、彦坂さんは「なぜ、愛国少年に純粋培養されていたのか⁽²²⁾」というご自身の切実な問いを抱えながら、「兵とは何か」と問うた赤松さんとのやり取りについて語っていた。彦坂さんと赤松さんのやり取りを彦坂さんは記録した。その記憶を私たちに語った。私たちもその記憶を語る彦坂さんとのやり取りを記録しておかなければならないのではないか。そう「直感」したのである。

2020年6月下旬、彦坂さんへのインタビュー動画が web で公開された。この間、日本では2020年3月下旬頃から次第にコロナ(covid-19)への感染状況が深刻化し始めた。そのことも関係して公開は遅れた。公開後、彦坂さんとのやり取りと私たちの思考のプロセスを記録することを嶋守へ提案した。彼女は承諾してくれた。

一方で、私のうちにあった「記憶の継承」への違和感を探るため、私は様々な論考にあたった。9月下旬、李静和『新編 つぶやきの政治思想』（岩波書店、2020年）を読んでいた。この本に収められた同タイトルの論考は1997年に発表されたものだが⁽²³⁾、私が最初に読んだのは2013年のことであった。この間考えてきたこととの重なりを感じた次の部分は、7年前に心を揺さぶられたところだった。

分からないこと、分かってはならないこと。消費するのではなく受容しなければならないこと。それは語る私に、聞く我々に、居心地悪さを残す。外部からはどう解釈してもいい。だが、いったん枠に入った瞬間からは、解釈することを拒否しなくてはならない。(中略)

一番気をつけなくてはならないのは特殊化してしまうこと。語られる事柄、あるいは語るという行為を特殊化しないようにしたい。語ったあと、聞いたあと、どう生きるかという問いを忘れないために⁽²⁴⁾。

記憶は「消費するのではなく受容しなければならない」とある。「消費」は「解釈」とも言い換えられている。ここには、私が感じていた「記憶の継承」に伴う違和感を、「モヤモヤとした感情」を言葉に変える鍵があるように感じた。記憶の受け手が、記憶を「消費」していると私は感じたのではないだろうか。受け手が、記憶の語りを要求していると感じたのではないだろうか。それが違和感の中身だったのではないか。

記憶を「継承したい」という欲望自体は必ずしもネガティブなものではない。だが、それが前面に出てしまえば、それは記憶の受け手が聞きたいように聞くことにつながる。その欲望が記憶の「消費」や「解釈」へと転じていくことを避けたいという思いが、私の中の違和感だったのだと、ようやく腑に落ちた。

では、受け手がその記憶を「消費」や「解釈」するのではない形で「継承する」にはどうすればいいのだろうか。以下では、彦坂さんとのやり取りのなかでの私の思考のプロセスを記していきたい。

3 彦坂さんの問い・赤松さんへの追及

2018年の12月に初めて会った彦坂さんにその場で私たちはインタビューを申し込んだ。そして翌年の4月にそれは実現した。その間、私たちは彦坂さんのことを知るべく、彦坂さんの著作を読み進めた。すると赤松清和さんへのインタビューをもとにした「ある無能兵士の軌跡」と題されたシリーズ著書が9冊も書かれていることを知り私は驚愕した⁽²⁵⁾。

どうしてここまで一人のひとにこだわったのか？ そのモチベーションは何だったのか？ 次々に私の中に知りたいことがわいてきた。彦坂さんが赤松さんにそこまで聞いたかったことは何だったのか。そこで受け止めたこと、考えたことはどのようなことだったのか、著書を読み進めながら、これらのことをどうしても知りたいという思いを強めていった。そして、その思いを持って2019年4月28日、インタビューに臨んだ。

(1) 立場が逆転する

彦坂さんが敗戦を迎えたのは現在の中華人民共和国の東北部に位置する旅順であった。1945年5月に彦坂さん一家は父親の仕事の都合で仙台から旅順へ移っている。敗戦後間もない45年10月には旅順から大連への移動を余儀なくされた。この頃の心境を彦坂さんはインタビュー

で次のように語った。

13歳で国家の崩壊を迎えた。そして異民族⁽²⁶⁾の支配を受けることになった。その時、大人たちが本当に情けないようなあられもないような転向をする、変身をする。(中略) ついこの間まで、「大日本は帝国の神国である」とか「この戦争には必ず勝つ」と説いていた同じ教師が、「あの戦争は帝国主義侵略戦争であった。天皇は戦争犯罪人である」ということを同じ教壇の一段高いところから生徒たちに押しつけるわけ。(中略) わたしのような、ちょっと自意識の強い子どもはついこの間と逆のことを言ってるじゃないかって信用しないわけだ⁽²⁷⁾。

中学生の彦坂さんの中に「当時『先生』として接していたひとたちに対する根底的な不信」がこのとき芽生えた。そしてそれは「いまなおわたしのうちに生きつづけている⁽²⁸⁾」と2020年の夏に出された『クオ・ヴァディス？ ある愛国少年の転生』で述べている。

彦坂さんは1945年8月15日までは「熱烈な愛国少年だった。(中略) 級友のだれよりも(中略) 純粋に『必勝の信念』にもえていたし、だれよりもはげしく『祖国』を愛していた。「それだけに敗戦の衝撃は大きかった」のである⁽²⁹⁾。その「祖国」日本が戦争に負け、帝国日本がこれまで中国で何をしてきたのかということをも中国人の子どもたちの自身への態度や行動によって彦坂さんは次第に気づくことになった。それは、生活のため母親が始めた豆腐の行商と一緒に回った時の体験からの気づきであった。

中学生の彦坂さんは、朝早く起きて豆腐を仕入れて売ってから学校へ行き、学校から戻ると午後には「立売(たちうり)」をした。台の上に商品を並べて、電熱器の部品や大福餅などを売ったのである。夕方になればまた豆腐を仕入れて売る。こうしてやっとその日の夕方から翌日の昼までの家族の食費がまかなえるという「文字通りのその日暮らし」を彦坂家は送った⁽³⁰⁾。

ところがこの貴重な豆腐を売っていると、中国人の少年たちに囲まれて石をバケツに投げ入れられるんです。めちゃくちゃに商品が壊されるんです。(中略)「殺す気か！」って本気になって怒りました。その時の私の意識は、敗けたっていう悔しさはあるけど、なぜこんな目にあわなきゃいけないかわからないんです。いわれないイジメなんですな⁽³¹⁾。

彦坂さん一家は、敗戦の年、すなわち1945年5月に日本から旅順に渡った。だから中学生の彦坂さんからすれば、中国人に対して「何もやった覚えがない」。それなのにいじめられるのはなぜなのか。これが当時の彦坂さんの率直な思いだったのである。

だが一方で、敗けたからこのようなことをされるのだとも感じ、「よーし見てろ、今度こそ勝つてやるぞ」とも思っていた。だが次第にその気持ちに変化が生じていった⁽³²⁾。

半年経ち、1年経ち、すると、少しずつ分かってくるんですね。なぜだろうと考えてた

けどどうしてもわからない。そのうちだんだんだんだんと私が日本人の少年だから、中国人の少年からやられるんだ。つまりこれは報復なんだ、仕返しなんだということを分かってくる。(中略) 日本民族が長い間、中国民族を虐げてきた。その仕返しなんだということが少しずつ分かってきた⁽³³⁾。

当初は、日本人であることで攻撃の対象になることを理不尽に感じていたが、次第に日本人だからこそ対象になるのだと気づいていった。だが、1945年8月15日以降も「(そうとう長いあいだにわたって) 熱烈な愛国少年だった」と彦坂さん自身のちに述べている⁽³⁴⁾ように、「日本人として復讐されるのはなぜか？」が本当にわかるまでには時間がかかった⁽³⁵⁾。

このように、一夜にして立場と価値観が逆転する事態によって13歳の彦坂さんは衝撃と葛藤の渦の中に置かれた。他方では自国の大人たちの変わり身の早さも目の当たりしたのである。ここでの体験が強烈なものだったことは想像に難くない。だからこそ「なぜ愛国少年に純粹培養されていたのか？」という問いがずっと彦坂さんの中に抱えられてきたのであり、この原体験を記した『クオ・ヴァディス？ ある愛国少年の転生』のことを「わたしが生涯かけて成し遂げたいと願っていた、死ぬ前になんとしてでも書き残しておきたいと決意してた、その作品⁽³⁶⁾」と述べているのだろう。

彦坂さんは問いへの忍耐を実践し、それに対する思考過程を過去にも記そうとしたという。だが、自分のことを自分で書くことは難しかったそうだ⁽³⁷⁾。そのように苦悩していた折に、赤松さんと出会うのである。

赤松さんがどのような体験をし、そこから彦坂さんがどのようなことを考えたのか。そのようなことを私はここで詳しく述べたいのではない。そうではなくて、彦坂さんが赤松さんにどのように問いをぶつけ、どのようなやりとりをしたのかを見ていきたい。

(2) 自分だったらどうだろう。

例えば、次のやりとりは象徴的だと思うので少し長いが引用したい。彦坂さんは赤松さんに「兵になるのを拒んだか」どうかと尋ねた。

赤松：ぼくのぼあいはね、その点、自分の選択だったんですよ。とられるかとられないかの鍵は自分が握っていたんですよ。だから、つらかった……

彦坂：自分の選択だった、と言いますと……？

赤松：兵隊にとられるかとられないかは自分しだいだと思っていたんですよ、青年であったぼくは。それだけ自尊心が強かったんですよ。自分の運命を他人に握られるなどということは、ぼくの自尊心がゆるさなかった。おのれの生死の問題を自分以外の者が左右するなどということを——その相手がたとえ国家というような、個人を超えた巨大な力であろうとも——ぼくはゆるすことはできなかった。だから辛かったんですよ。選択はこのぼくにあるんだから。

とられるのがいやだったら、行かなくてもすむわけですよ。どうするかというと、自殺する、ちゅうのも一つの方法でしょう？ それから、自傷——自分で自分をたわにする。あるいは、ゆくえをくらまして地下生活をするとか……しかし、そういう方法を、ぼくは、よう選ばないし……⁽³⁸⁾

「行かなくてもすむ」とは徴兵忌避のことを指すが、これを「よう選ばない」のはなぜかと彦坂さんは追及を続ける。

彦坂：徴兵忌避は「抵抗」ではなく個人的忌避にすぎないといった考えがあったのでしょうか？

赤松：ありましたね、はっきりしたものではないが。ほかのやつらがみんな〔兵隊〕行ってるのに自分だけそういうことをするのを、ぼくは恥としましたね⁽³⁹⁾。

2019年4月に私たちが赤松さんのことを彦坂さんへ尋ねたとき、最初に、彦坂さんはこの時のやりとりを振り返っている。徴兵を忌避しなかった理由を聞いた時の赤松さんの応答が非常に印象的だったようだ。続けて次のように彦坂さんは言った。

そういう風に聞いただけでいでしょうか？ そこに成立するのは非常にきわどい対話なんです。ほとんど追及に近いような質問をどんどんやっていくわけなんです。知りたいからね⁽⁴⁰⁾。

彦坂さんは、赤松さんとのやり取りの中で、「赤松さんの生き方を追及すると必然的に自分の生き方を追及することになるな」と感じたのだという⁽⁴¹⁾。そのような場面での心境を「自分だったらどうだろうってモクモクと出てくるんですよ」とも彦坂さんは語った⁽⁴²⁾。

嶋守がインタビューで赤松さんの存在を読者にどのように受け止めて欲しいかと問うたとき、彦坂さんは次のようにこたえている。

「ほお、こんな人もいたのか」これが大部分の人です。(中略) 自分に関わりがない人っていう風にして面白おかしく読める。だけど自分がどうかってことには関わりがない。大部分の人がそうです。ほんの少数、自分はどうなんだろう？ なれるんだろうかって悩む人がいたらそのひとこそが読者⁽⁴³⁾。

この部分で彦坂さんの語っていることが、「わたしが記憶を受け継ぐ」とはどういうことかを考える上で重要なことだといつ最近になって私は気がついた。2019年の10月にインタビュー映像の編集作業をして以降、私は改めて彦坂さんの著書で彦坂さんと赤松さんの対話を追っていた。同時に、私の中にある「記憶の継承」への違和感についても探求し、李静和の『つぶ

やきの政治思想』に7年ぶりに再会しそこで再度心を揺さぶられたのが先に引用した箇所であった。その後半部にはこうあった。

一番気をつけなくてはならないのは特殊化してしまうこと。語られる事柄、あるいは語るという行為を特殊化しないようにしたい。語ったあと、聞いたあと、どう生きるかという問いを忘れないために⁽⁴⁴⁾。

彦坂さんが赤松さんの記憶と向き合う際に「自分だったらどうだろう」と自分に引きつけていたことと、上記で言われていることは重なっているのではないだろうか。彦坂さんは赤松さんの記憶を「特殊化」するのではなく自分に引きつけたのではないだろうか。

そうだとすると、「記憶を受け継ぐ」というとき私たちはそのこと自体を目的と捉えがちだが、それよりも前になぜその記憶に「わたし」が向き合おうとしているのかを知ることが大切になってくるのではないだろうか。

彦坂さんが赤松さんと「きわどい対話」を重ねていくことになったのは、彦坂さんの中にあつた問いへのこたえを探していたからであった。私が、彦坂さんの赤松さんとの「きわどい対話」の記憶に向き合ったのは、やはり私の中に『『わたしが記憶を受け継ぐ』とはどういうことか』という問いがあつたからである。

4 わたしが記憶を受け継ぐ

上記のような思考の途中で、私は再び、李静和『つぶやきの思想』の引用にあつた「消費するのではなく受容しなければならぬ」の「受容」という表現が気にかかってくる。すぐ前のところで私は、記憶に対して「向き合う」という言葉を使っている。だが、実際には、彦坂さんも私もそれぞれに記憶を「受容」していたのではないだろうか。「向き合う」という能動的な態度というよりも、記憶の受け手は何がしかの経緯によって誰か／何かの記憶に接近をする。そしてその記憶を受容する。そのようなプロセスがここにはあるのではないか、そう思ってきたのである。

だとしたら、わたしが自身の中の問いとその記憶に重なる部分を「直感」したときが、わたしがその記憶を「受容」し始めたときということになるのではないだろうか。そして、その「直感」を言葉に置き換えていく、つまり自分にひきつけて思考していくプロセスまでが「記憶の継承」ということになるのではないだろうか。

記憶への接近のあり方は、例えば読んでいた本を通じてということもあるだろうし、大学の講義で誰かの記憶の語りを聞いてということもあるだろう。そこから、彦坂さんが言った「自分だったらどうだろう」という自問自答が起こされるかどうか、その記憶を「特殊化」するかどうかの分かれ目となるのではないだろうか。同時に、それは自分の欲望にそう形で記憶を「消費」、「解釈」するかどうかの分かれ目にもなるのではないだろうか。

「わたしが『記憶を受け継ぐ』とはどういうことか」という問いを抱えた私が、彦坂諦さん

と出会い、そこで感じた「直感」を、彦坂さんが赤松さんの記憶を「受け継ぐ」プロセスを追うなかで言葉に置き換えていき、そして上記のようなこたえに行きあたった。すなわち「わたしが記憶を受け継ぐ」とは、記憶を持つ、あるいは語る人と受け手のわたしとの相互のやり取りとそこを通じたわたしの自問自答のプロセスだと言い換えられるのではないだろうか。

補論：白井愛さんとの出会い・「直感」への信頼

ここまで「わたしが記憶を受け継ぐ」とはどういうことか彦坂諦さんとのやり取りを通じて考えてきた。最後に、ここまでの思考のプロセスで鍵となった「直感」への信頼を取り戻す契機となった白井愛⁽⁴⁵⁾さんとの出会いについて触れておきたい。白井愛さんとはかつての浦野衣子であり、フランツ・ファノン『地に呪われた者』、ポール・ニザン『トロイの木馬』の翻訳者としても知られている。白井さんと彦坂さんは研究者同志として大学時代に知り合った。

彦坂さんの著書を読み始めてすぐに、白井さんの文章や詩からの引用が多いことに気づいた私は、この社会への強い違和感を述べる白井さんの言葉のなかで特に印象的だった言葉についてインタビュー時に彦坂さんにたずねた。

五郎丸：特に印象的だったのが「和の権力」（という言葉：引用者）です。ルビに「みんないっしょ⁽⁴⁶⁾」とふってあって、それは一見ソフトなんだけど、でも恐ろしい支配の形だと書かれていて、それはその通りだ（と思った）というかすごくインパクトがあったんですね。言葉になっているので。（中略）これはお二人で議論というか対話をされたものだったんですか？

彦坂：（前略）生活の実感の中から、おのずから出てきた考え方なんです。どういう考え方かという、みんなと同じようなことをみんなと同じようにいっしょにやっていたら、一応安泰なわけなんですよ。（中略）みんなと同じようなことをみんなといっしょにやらないとなったらこれは完全に異物になる。異物は排除される。で、私たちは排除される側になっちゃった。そっからきた痛切な思いなんですよ⁽⁴⁷⁾。

インタビューの帰り際、彦坂さんご自身が書かれた出来上がったばかりの『亜人間を生きる——白井愛 たたかひの軌跡』（「戦争と性」編集室、2019年）を私たちに渡された。白井愛さんのことをもっと知りたいと思っていた私はすぐに読み始めた。自分に引きつけようなどと思う間もなく白井さんの軌跡を追っていった。同時に、思いのままにふるまうと「異物」とされ、それが辛いために「みんな」と「いっしょ」の態度を示すことを選択した幼少の頃に、私は一気に引き戻された。「異物」として排除されることへの恐怖と、そこから逃げた選択への悔いはずっと私のうちに沈殿していたことを、白井愛さんとの出会いにより私は気づかされた。白井さんのように私はたたかってこなかった。読み進めながら自分の感情の波に圧倒されたが、それは、自分の本当の声をなきものにせずちゃんと聞くプロセスでもあった。

自分の声は、ときにとても小さい。抑圧されて隠れていることもある。だが、「直感」がそこに気づかせてくれることがあるのだと、白井愛さんとの出会いを通じて私は知った。「直感」への信頼をあらためて感じた。

2020年10月より本稿の執筆を始めた私は、11月中旬にその報告を彦坂さん宛の葉書に書いた。そのお返事の最後に「あなたに、すてきな発見がありますように」とあった。とてもすてきな発見があったことをここに記しておきたい。

おわりに——直感の共振

この論文で、著者である私たちがここに記しておきたかったことは、結局、「忘れないって知性なんです⁽⁴⁸⁾」という言葉に集約できる。これは、糸井重里がニュース・レポーターに発した言葉である。

彦坂さんに出会い、「もっと彦坂さんの話しを聞かずにはいられない」と直感した私たちだったが、この論文に纏めるにあたって、彦坂さんの語りと語りの文脈に透けてみえる戦争というものをもまずはそれぞれに、ナイーブに（先述した「直情的な素直さ」、「後付けできる理由や理屈を抜きにした単純さ、無垢」で無防備な「わたし」の「純真さ」という意味で）受けとめた。そして、それぞれが受けとめた彦坂さんの語りを次なる世代の「わたし」たちへと伝達しようとしている私たちが、「忘れないための知性」をいかに備え、持ち続けていくのか。

「忘れないための知性」をつけておくべきだする意識の内実を、この論文の最後で確認しておきたい。それを、鷲田清一は次のように示している。

「人には、忘れるという『自然』に抗ってでも忘れてはならないことがある。凄絶な被災や事故、そして戦争。二度と悲惨な経験を繰り返さないよう、想像力を駆使して憶えつづけなければならないことが。そのような想像力を保ちつづけるためにいろんな補助線を引いてくれるのが『知性』だと（中略）先の言葉につづけ、糸井さんはこうも言っている。《ぼくも忘れてしまうから、自分が飽きないように、面白くなるように考えるんですよ》記憶のみならず知性もまたそれほど強靱なものではないから、それを維持するには支えが要る⁽⁴⁹⁾。

記憶を受け継ぐ。受け継がれた記憶を愚直に誠実に精緻に記録し、その記録に出会えた次世代のナイーブな直感へと繋ぐ。それをもたらすのが「何か面白いから、そのひとの話しを聞かずにはいられない」という聞き手の知的な好奇心、想像力を刺激し、直感を働かせられる語り手としての「私」の知的体力だ。

戦争体験のないわたしたちが、忘れないための知性を維持する支えは、「知りたい」と「忘れてしまいたくはない」とする意志である。そこに、どれだけ「わたし」の感情、怒り、好奇心を入れ込めさせられるか。わたしの語り、次なる世代の純真なるわたしへと受け継ぐ機会

をいかに提供できるか。受け継ぐことのできる機会に、いかに出会える備えをしておくか。常に記憶を風化させない知性を磨く努力を怠らない。私は、直感の認識構造を意識しておこう。

註

- (1) 嶋守さやか・五郎丸聖子「記憶の継承(1)——『仕方がない』では済まない」という言葉が問いかけること——『桜花学園大学保育学部研究紀要』第18号、2018年。
- (2) 彦坂諦さんプロフィール：1933年、仙台で生まれ、山口で育つ。1945年5月、教員だった父の転勤に伴い、大日本帝国の植民地都市の旅順に移り、敗戦を迎え、まもなく難民として大連に追放された。1949年10月、引揚者として帰国。1957年、東北大学文学部国史学科卒、1967年早稲田大学大学院ロシア文学科博士課程満期退学。木材検収員、通訳、非常勤講師（芝浦工業大学）をしつつ評論活動をしてきた。1978年より1995年まで約17年の歳月をかけて、シリーズ『ある無能兵士の軌跡』を完成させた。その他の著書に、『男性神話』（径書房、1991年）他、多数。また近年では『亜人間を生きる——白井愛 たたかひの軌跡』（「戦争と性」編集室、2019年）、『クオ・ヴァデイス？ ある愛国少年の転生』（柘植書房新社、2020年）を刊行している。
- (3) 2019年4月28日インタビューより（第3回フェミニズム・リサーチ・ライブラリ〈第1部〉）WAN サイト、<https://wan.or.jp/article/show/9008>にて公開（以下、インタビューと記載）。このインタビュー動画は2019年度桜花学園特別研究費にて制作したものである。
- (4) PLANETS【「特別対談」國分功一郎×宇野常寛「哲学の先生と民主主義の話をしよう」前編（毎週金曜配信『宇野常寛の対話と講義録』）note、<https://note.com/wakusei2nd/n/nac7ee043bf14>、情報取得日2021年1月4日。
- (5) 大澤真幸『コロナ時代の哲学』左右社、2020年、6頁。
- (6) 彦坂諦「日本兵と男性性」加藤千香子・細谷実編著『暴力と戦争』明石書店、2009年、308-310頁。
- (7) 田中克彦『差別語からはいる言語学入門』筑摩書房、2012年、58頁。
- (8) 上野千鶴子『女という快楽 新装版』勁草書房、2006年、vi頁。
- (9) 田中（2012）前掲書63-64頁。
- (10) 上野千鶴子「『ふつうの男』が『殺人兵器』に」『熊本日日新聞』2018年9月9日（朝刊）。
- (11) 鷺田清一「折々のことば」1972、朝日新聞2020年10月23日（11）
- (12) 鷺田清一（2019a）『濃霧の中の方向感覚』晶文社、2019年、7頁。
- (13) 鷺田清一（2019b）「小さな肯定」内田樹『街場の平成論』晶文社、2019年、254頁。
- (14) 彦坂諦「記憶の風化と記憶への冒瀆」『神奈川大学評論』第39号、2001年、160-163頁。
- (15) 彦坂諦『男性神話』径書房、1991年。
- (16) 彦坂諦（2009）前掲論文。
- (17) 千田有紀・中西祐子・青山薫『ジェンダー論をつかむ』有斐閣、2013年、147頁。
- (18) 彦坂諦（1991）前掲書、162頁。
- (19) 同上。
- (20) 彦坂諦（1991）前掲書、164頁。
- (21) 彦坂諦（2009）前掲論文。
- (22) 彦坂諦『クオ・ヴァデイス？ ある愛国少年の転生』柘植書房新社、2020年。
- (23) 李静和「つぶやきの政治思想・求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたるものへの」『思想』1997年6月号、岩波書店、114-127頁。

- (24) 李静和『新編 つぶやきの政治思想』岩波書店、2020年、4-5頁。
- (25) 『ひととはどのようにして兵となるのか ある無能兵士の軌跡第1部(上)(下)』罌粟書房、1984年。『餓島1984-1942 ある無能兵士の軌跡第2部(ガダルカナル篇)別巻』罌粟書房、1987年。『兵はどのようにして殺されるのか ある無能兵士の軌跡第2部(ガダルカナル篇)(上)(下)』罌粟書房、1987年。ある無能兵士の軌跡・別冊『ガダルカナル1942.10/1-27』罌粟書房、1987年。『ひととはどのようにして生きのびるのか ある無能兵士の軌跡第3部(フィリピン篇)(上)(下)』柘植書房、1995年。『総年表ある無能兵士の軌跡 ある無能兵士の軌跡最終巻』編著、柘植書房、1995年。いずれも、現在、柘植書房新社で刊行。
- (26) 敗戦後の大連は、ソ連の軍政下に置かれた。この年の中ソ友好条約では大連市政は中国地方政権に置かれた。ソ連の軍政は中国人市政を間接に管理する形をとったが、国民党にも共産党にも公然とした政治活動は許さず、1946年2月初め東北部で内戦が始まった後も、戦火から守られた。木村英亮「ソ連軍政下大連の日本人社会改革と引揚の記録」『横浜国立大学人文紀要第一類 哲学・社会学』(42)、1996年、23頁。インタビューでは彦坂さんはソ連兵と中国人の支配下に置かれたと語っている。彦坂さんが「引揚者」として大連から帰国したのは1949年10月である。
- (27) 2019年4月28日インタビュー (web 未公開分)
- (28) 彦坂諦 (2020) 前掲書、96頁。
- (29) 彦坂諦『人はどのようにして兵となるのか(下)』柘植書房、1984年、356頁。
- (30) (第3回フェミニズム・リサーチ・ライブラリ〈第1部〉) <https://wan.or.jp/article/show/9008> (以下 web 公開分)
- (31) インタビュー (web 公開分 (第1部))
- (32) 同上。
- (33) 同上。
- (34) 彦坂 (1984・下) 前掲書、356頁。
- (35) 彦坂 (2020) 前掲書、71頁。
- (36) 同上、表紙裏著者コメントより。
- (37) インタビュー (web 未公開分)。その後、今年2020年になって、当時のご自身の日記をもとに書かれた著書(『クオ・ヴァディス? ある愛国少年の転生』)を出された。
- (38) 彦坂 (1984・上) 前掲書、116頁。
- (39) 同上、117頁。
- (40) インタビュー (web 公開分〈第1部〉)
- (41) 同上。
- (42) インタビュー (web 未公開分)
- (43) 同上。
- (44) 李静和 (2020) 前掲書、4-5頁。
- (45) 1934年、大阪府岸和田市生まれ。高校時代に、後に「わたしがわたしであり続ける力をわたしに抱かせてくれた稀有な先生でした」と語ることになる赤松清和氏と出会う。(彦坂諦『亜人間を生きる』より)彦坂さんに赤松さんを引き合わせたのは白井さんである。1979年、白井愛として『あらゆる愚者は亜人間である』(罌粟書房)を刊行。以降、『新すばらしい新世界スピークス——エッセー・クリティク+フィクション・クリティク』(罌粟書房、1981年)など多数創作。2005年2月20日に癌により亡くなられた後、闘病記『人体実験——ガンとのたたかい、生のたたかい』(れんが書房新社、2005年)が刊行された。
- (46) 例えば、次のように彦坂さんは白井愛さんの言葉を引用している。「白井愛が根底的に異議を申し立てようとしているのは、ほかでもないこのようなソフトな構造的暴力の支配するこの〈世

界)にたいしてなのだ。(中略)このソフトな暴力的支配〔と白井愛が考えているところのもの〕を、ひとびとはふつう、支配であるとも管理であるとも感じていないからだ。とりもなおさず、その支配とは「和の権力」^{みんないっしょに}による支配であるからだ」。彦坂(1984・上)前掲書、80頁。

- (47) インタビュー (web 公開分〈第2部〉)
- (48) 鷺田清一(2019a)前掲書149頁。
- (49) 同上150-151頁。

(受理日 2021年1月7日)